

問1 ドイツ観念論の発展において、ある哲学者が提示した理性と自由のあり方は、後続の思想家から「現実の歴史や社会から切り離された抽象的なもの（空虚な義務）にとどまっている」と批判された。この批判を行ったヘーゲルに対し、批判の対象となった、純粹理性批判や実践理性批判を著して批判哲学を確立した哲学者は誰か。（2009年 全国公立入試 類似）

1. フィヒテ 2. ヘーゲル 3. カント 4. シェリング

問2 『監獄の誕生』などの著作で知られ、近代社会における学校、病院、軍隊、監獄などの制度や装置が、人々の身体や精神を規律化し、従順な人間を作り出す権力の仕組みを分析したフランスの思想家は誰か。（2019年 全国公立入試 類似）

1. デリダ 2. ラカン 3. バルト 4. フーコー

問3 17世紀のフランスの哲学者は、感覚による認識は欺く可能性があるとして一切を疑い、これ以上疑うことのできない確実な真理を出発点とした。この確実な前提から、理性的な推論を重ねることで個別の具体的な知識を導き出す思考方法を何というか。（2025年 全国公立入試 類似）

1. 直観法 2. 弁証法 3. 演繹法 4. 帰納法

問4 自然状態における人間は、自己愛と他者への憐れみの心によって平和に暮らしていた。しかし、社会の形成に伴って世間の評判を気にする虚栄心が生まれ、さらに土地の所有が始まったことで、自由と平等が失われ社会的な不平等が決定づけられたと主張した、18世紀フランスの思想家は誰か。（2024年 全国公立入試 類似）

1. ロールズ 2. ロック 3. ホッブズ 4. ルソー

問5 自己の都合や枠組みに回収することのできない絶対的な他者との関係性を重視し、その他者の「顔」と向き合うことで、自己はその他者に対して無限の責任を負う存在であると自覚させられるという倫理思想を提唱した、フランスの哲学者は誰か。（2025年 全国公立入試 類似）

1. レヴィナス 2. ドゥルーズ 3. フッサール 4. ハイデガー

問6 ヤスパーズの哲学において、死、苦しみ、争い、罪など、人間の力では克服することも回避することもできない、自己の有限性を自覚させる決定的な状況を何と呼ぶか。（2004年 全国公立入試 類似）

1. 限界状況 2. 自己欺瞞 3. 単独者 4. 世界内存在

問7 キリスト教的な同情や平等を重んじる既成の道徳を、弱者が強者に対して抱く怨恨から生じた「奴隷道徳」として批判し、人間本来の生命力や「カへの意志」に基づく生の肯定を説いた、19世紀後半のドイツの哲学者は誰か。（2026年 全国公立入試 類似）

1. ニーチェ 2. ヤスパーズ 3. マルセル 4. サルトル

問8 イギリスの哲学者ベーコンが提唱した、人間の正しい認識を妨げる4つの偏見（イドラ）のうち、個人の資質や性格、受けた教育、置かれた環境などの個人的な要因に起因する偏見を何というか。（2019年 全国公立入試 類似）

1. 種族のイドラ 2. 洞窟のイドラ 3. 劇場のイドラ 4. 市場のイドラ

問9 人間を単なる手段としてのみならず、絶対的な価値を持つものとして、自分と他人のそれを常に同時に目的として尊重すべきであるとする、ドイツの哲学者が提唱した倫理思想を何というか。（2007年 全国公立入試 類似）

1. 感情主義 2. 功利主義 3. 実存主義 4. 人格主義

問10 社会全体の幸福を「最大多数の最大幸福」という標語で表現し、個人の快樂には質の差はなく、強さや持続性などの基準によって客観的に測定・計算できるものとして捉えた、功利主義の創始者とされるイギリスの哲学者は誰か。（2025年 全国公立入試 類似）

1. ヒューム 2. ロック 3. ホッブズ 4. ベンサム

答え合わせ・解説 No.2

問1	答え 3 カント	ヘーゲルは、個人の内面における道徳的自律を重視したカントの哲学を、現実の歴史的・社会的文脈を欠いた抽象的なものであると批判した。カントの説く道徳は主観的な「道徳」にとどまり、客観的な社会制度である「人倫」においてこそ自由が具体化されるとヘーゲルは主張した。
問2	答え 4 フーコー	近代社会における「規律・訓練」の権力を分析し、人間を規律化する制度や装置の発達に近代の特徴を見いだした。一方で、その権力に対する抵抗や、服従を拒み社会を変えていく主体的な力にも着目した。
問3	答え 3 演繹法	感覚的な経験を疑い、理性の働きによって確実な真理から論理的に結論を導き出す方法は演繹法と呼ばれる。これに対し、観察や実験などの経験的事実を積み重ねて一般的な法則を導き出す方法は、ベーコンらが重視した帰納法である。
問4	答え 4 ルソー	自然状態の人間は自己愛と他者への憐れみの心によって平和に暮らしていたが、社会の形成に伴い世間の評判を気にする虚栄心が生まれ、さらに土地の所有が始まったことで、自由と平等が失われ社会的な不平等が決定づけられたと主張した。この思想を展開したのはルソーであり、彼は『人間不平等起源論』において文明社会の成立に伴う人間の墮落を批判した。
問5	答え 1 レヴィナス	自己の理性の枠組みに他者を当てはめて理解しようとする全体主義的な思考を批判し、自己にとって異質な、回収不可能な存在としての他者との関係を重視した。他者の「顔」が発する呼びかけに応答し、その他者に対して無限の責任を負うことこそが倫理の根本であると主張した。
問6	答え 1 限界状況	人間が自らの力ではどうすることもできない壁に突き当たったとき、自己の有限性を自覚して絶望するが、それを契機に超越者と出会い、真の実存に目覚めることができるとされる。このような死や苦しみ、争い、罪などの状況を、ヤスパーズは「限界状況」と名付けた。
問7	答え 1 ニーチェ	キリスト教的な道徳を弱者の怨恨（ルサンチマン）に由来する「奴隷道徳」として批判し、神の死を宣告して、自らの価値を自ら創造する「超人」や「カへの意志」による生の肯定を主張した。
問8	答え 2 洞窟のイドラ	ベーコンが提唱した4つのイドラのうち、個人の資質、教育、境遇などの個人的な要因から生じる偏見は「洞窟のイドラ」と呼ばれる。これは、個人が自分だけの狭い「洞窟」の中から世界を見ていることに例えられている。
問9	答え 4 人格主義	人間を単なる手段として扱うのではなく、絶対的な価値を持つ人格として、自分と他人の人格を常に目的として尊重することを求める思想である。これは、自律的な道徳法則に従う主体としての人間（人格）に無限の価値を認める立場に基づいている。
問10	答え 4 ベンサム	個人の快樂の総和が社会全体の幸福につながると考え、快樂を数量的に計算可能とする立場（量的功利主義）を提唱した。この思想は、法制度の改革や民主主義の発展に大きな影響を与えたが、のちに快樂の質的差異を重視するJ. S. ミルによって批判的に乗り越えられることとなった。